狛江市 文化財 散策マップ

主なみどころ

寺院

2 千手院
東野川2-4-2 C-2
山号を三島山、寺号を覚東寺と号し、かつての字名や村名を冠した天台宗の寺院です。貞享5年(元禄元年・1688)に創建されたと伝えられています。

神社

3 小足立八幡神社
西野川2-33-1 B-1
江戸時代は、小さな社で小足立村の鎮守でした。由緒は不詳ですが、元禄10年(1697)の検地帳には八幡宮地として書き上げられています。

神社

7 子之三嶋神社
西野川1-17-8 B-1
明治時代のはじめに、覚東村の一同が相談し、千手院の境内にあった三嶋神社を遷座して根之神社に合祀しました。現在は子之三嶋神社と呼ばれています。

神社

4 白幡菅原神社
猪方2-4-4 C-4
江戸時代は玉泉寺に隣接していました。明治時代のはじめに、社殿を現在地に曳いてきたといわれ、その様子を描いた絵馬が伝わっています。

神社

5 日枝神社
駒井町1-6-11 D-4
もとは山王権現と称し、江戸時代の記録によると、木の鳥居が立つ小さな祠でした。参道には、イチョウやケヤキの木が並び、秋には奇麗に色づきます。

寺院

6 圓住院
駒井町1-6-10 D-4
寺号を里沙門寺と号する天台宗の寺院で、隣接する日枝神社の別当寺でした。文禄3年(1594)の駒井村の検地帳にみられる毘沙門堂が、圓住院の前身だったと考えられます。

寺院

7-a 明静院
岩戸南2-10-13 D-4
享禄3年(1530)開創との記録がある天台宗の寺院で、隣接する岩戸八幡神社の別当寺でした。山門と本堂の間には、ケヤキの大樹がそびえ立っています。

市指定文化財

7-b 木造薬師如来坐像
明静院 D-4
天正2年(1574)の制作で、腹前で法界定印を結び、現在は失われていますが、両手の掌に薬壺を置いていたとみられます。一般的な薬師如来像には見られない定印薬師の姿が特徴です。
※秘仏につき通常は非公開。

神社

8 岩戸八幡神社
岩戸南2-8-2 D-4
戦国時代に、岩戸の秋元仁左衛門という人物が、鎌倉の鶴岡八幡宮にて催された大相撲に勝ち、懸賞の八幡神体を持ち帰って神社を勧請したとの伝承があります。

寺院

11 慶岸寺
岩戸北4-15-8 D-3
浄土宗の寺院で、江戸時代のはじめ頃に岩戸村の村人によって開基されたとの記録があります。

寺院

1 玉泉寺
東和泉3-10-23 B-4
永正元年(1504)の開創とされる天台宗の寺院です。北条氏政の祈願所だったとの記録があります。多摩川沿いに位置していましたが、洪水で流失し、現在地に移転したといわれます。

山門の脇には、市の天然記念物に指定されているボダイジュが立っています。近隣には稀な大樹で、樹齢は300年以上と見つけられます。

記念碑

2 多摩川決壊の碑
多摩川自由ひろば内 B-5
昭和49年(1974)9月、大型の台風の影響で多摩川が増水すると、猪方地先の堤防が決壊し、家屋19棟が流失する大惨事となりました。平成11年(1999)にモニュメントが設置され、水害の怖さや治水の重要性を伝えています。

名勝

4 五本松
A-3
「五本松」と呼ばれるクロマツの並木は、明治40年代の大洪水の後、築堤の際に植えられたといわれています。多摩川と五本松の景観は、「新東京百景」に選ばれ、都内の景勝地の一つに挙げられています。

史跡

6 8 玉翠園跡
中和泉4-15内 A-3
大正2年(1913)に開業した「玉川清遊」のための庭園の跡地です。園内には松の老木や梅などが林立し、東屋が設けられ、四季折々の風景を楽しむことができました。また、園内の玉翠亭では、主に川魚料理を味わうことができました。

神社

6-a 伊豆美神社
中和泉3-21-8 A-3
もとは六所明神と称し、寛平元年(889)に武蔵国の国府から大國魂大神を分霊してきたといわれています。天文19年(1550)の洪水で流失し、多摩川沿いから現在地に遷座しました。明治維新に際し伊豆美神社と改称されました。

市指定文化財

6-b 伊豆美神社鳥居
A-3
参道入口に立つ高さ約2.6m、柱間約1.5mの小振りの石造鳥居です。材質は花崗岩と考えられます。慶安4年(1651)に、和泉村の領主石谷清定の三男貞清によって奉納されました。

市指定文化財

6-c 井伊直弼公敬慕碑
伊豆美神社 A-3
開国を成し遂げた井伊直弼の功績と井伊家に儒学者として仕えた小町雄八の遺徳を伝える石碑で、明治34年(1901)に建てられました。台石には建碑の賛同者378名の名前が刻まれ、三多摩地域の有力者の名前も見られます。

都指定旧跡

7 7 玉川碑(万葉歌碑)
中和泉4-14内 A-3
「万葉集」の東歌の一首が刻まれた歌碑で、松平定信の揮毫になります。江戸時代後期に猪方村字半縄(現在の猪方四丁目辺り)に建てられましたが、洪水によって流失しました。大正時代に、松平定信を敬慕する渋沢栄一に協力を仰ぎ、旧碑の拓本を模刻した歌碑が再建されました。

本堂には、安置されている子安地蔵は、「まわり地蔵」と呼ばれる巡行仏で、広く信仰を集めました。巡行の範囲は、近郷にとどまらず、多摩地域、江戸近郊、江戸市中、さらには入間や所沢などにまで及びました。

寺院

12-a 泉龍寺
元和泉1-6-1 B-3
奈良東大寺別当の良弁僧正が草創したといわれ、江戸時代初期に、曹洞宗の鉄叟瑞牛と和泉村領主の石谷清定が寺院として整備しました。徳川将軍家から朱印地20石を拝領し、境内は約1万6,900坪に及びました。

市指定文化財

12-b 泉龍寺の建造物
B-3
本堂
宝永3年(1706)に再建されたもので、本堂内部に江戸時代の遺構をよく残しています。
開山堂
弘化4年(1847)に建立されたもので、堂内の格天井などは江戸時代の遺構と考えられます。
鐘楼門
牟礼材(現・三鷹市)の眉山金毛和尚の奉納金を基に、まわり地蔵の講中などの寄進によって、天保15年(1844)に再建されました。石積または袴腰の基壇部がなく、4本の柱で門の形態をとった珍しい鐘楼門です。
山門
安政6年(1859)に再建されたもので、再建時は切妻造の瓦葺屋根でした。建築を請負ったのは和泉村の大工で、舟材は境内の樹木が用いられました。

市指定史跡

13 弁財天池
元和泉1-8内 B-3
古くから知られる湧水で、「しみず」と呼ばれてきました。早魃の時に良弁僧正がこの地を訪れ、雨を祈ると、竜蛇が現れて雨を降らし、清水が湧き出たとの伝説があります。

都指定文化財

和泉式土器
C-3
昭和15年(1940)に、工場の整地工事の際に偶然発見された古墳時代中期の土器です。南関東地方ではじめて発見されたもので、地名をとって「和泉式土器」と名付けられました。狛江第一小学校の北東角にモニュメントがあります。

狛江のあゆみ

狛江市の前身である狛江村は、明治22年(1889)の町村制の施行により、江戸時代から続く和泉・岩戸・駒井・猪方・覚東・小足立の6か村が合併して誕生しました。当時は、田んぼや畑が広がり、東京市中で消費される物資を供給する大都市の近郊農村でした。また、副業として養蚕が盛んに行われ、桑畑も広がっていました。

大正12年(1923)の関東大震災は、東京西郊の村々にとっても転機になりました。東京の下町地域で被災した人々が山の手地域に移り住むようになり、それまで山の手地域が担っていた役割を東京西郊の農村が担うようになります。狛江村でも、蔬菜や果樹の栽培が盛んになり、多摩川周辺には、梨や桃などの果樹園が広がっていきました。

昭和2年(1927)に小田原急行鉄道(現・小田急電鉄)が開通すると、宅地開発が緩やかに進み、工場も建設され、まちの景観が少しずつ変化していきました。

戦後の復興期には、農地の再生やインフラの整備などが進められ、昭和27年(1952)に町制が施行されます。さらに、高度経済成長へと向かう中で、急速に都市化が進んでいきます。住宅や工場が過密する都心部の人口が飽和状態になると、快適な住環境を求める人たちは鉄道沿線の郊外に注目し、多摩川の自然と武蔵野の野趣の残る狛江に多くの人が移り住むようになりました。そして、昭和45年(1970)に市制が施行されました。

一方で、急速な都市化は様々なひずみを生み、自然環境の悪化や、線路によるまちの分断が問題となります。こうした問題を乗り越えるべく、環境美化や樹林地の保全などに取り組み、平成9年(1997)には、小田急電鉄と東京都による高架化複々線化事業が完了して、まちの一体化が進みました。

そして、今も狛江市は、水と緑に恵まれた住宅都市として発展を続けています。

昭和50年代のまちの様子

住宅都市として発展していく中で、まちの景観も大きく変わっていきました。

あ 狛江駅南口側から旧狛江第一小学校・市役所を望む B-3
駅は地上にあり、ホームは跨線橋でつながっていました。跨線橋の奥は旧一小の校舎、さらに右奥に市役所が見えます。左手は弁財天池の森。

い 狛江駅 C-3
駅舎(改札口)は南口にありました。

う 狛江駅北口 B-3
駅から泉龍寺に向かう小路。右手に旧一小がありました。

え 和泉多摩川駅前 B-4
狛江高校交差点から和泉多摩川駅に向かう小路。

お 世田谷通りの陸橋 B-4
世田谷通りが陸橋で小田急の線路を越えていました。奥の坂が陸橋。

か 旧狛江第一小学校北側
(現・メビウスきまえ広場北側) B-3
狛江駅北口再開発で、駅周辺の様子は大きく変わりました。

市の概要

狛江市は、多摩川の左岸、武蔵野台地の南縁に位置しています。市域の南部は、多摩川が形成した沖積低地ですが、台地と低地の高低差はわずかで、緩やかに南に傾斜する日当たりのよい環境が広がります。

面積は、約6.39㎢で、東は世田谷区、西と北は調布市、南は多摩川を挟んで神奈川県川崎市に接しています。市域のほぼ中央を東西に小田急線が走り、バスによって京王線の調布・国領、東急線の渋谷・二子玉川、JR中央線の武蔵境などとつながります。

南には多摩川、北には野川が流れ、水辺には野鳥が飛来し野草が植生する豊かな自然が広がります。多摩川沿いからは対岸の枡形山だけでなく、丹沢や秩父の山並、さらには富士山を遠望することができます。また、樹林地や畑に残る緑は、武蔵野の野趣を偲ばせてくれます。

都心へのアクセスも良く、自然豊かで快適な住環境は、多くの人を惹きつけています。令和元年5月現在の人口は8万人を超え、住宅都市として発展を続けています。

市章

昭和45年10月1日制定

市制施行に際し、公募によって寄せられた作品の中から選ばれたものです。狛江の頭文字の「こ」を図案化し、中央の流線は多摩川の流れを表現しています。

KOMAE CITY 狛江市

2020年は狛江市市制施行50周年です。

市の木

イチョウ
昭和48年4月1日制定

狛江第三中学校のイチョウ並木

市の花

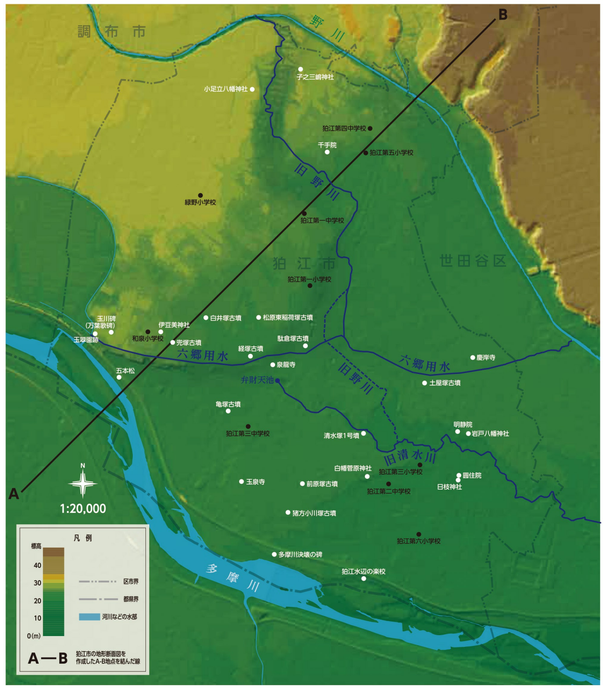
ツツジ
昭和48年4月1日制定

狛江教育発祥之地に咲くツツジ

市役所上空付近から多摩川方面を望む

表紙の写真は、上からむいから民家園、六郷さくら通りの桜並木、多摩水道橋、泉龍寺の鐘楼門、万葉歌碑、兜塚古墳、狛江駅北口上空から多摩川方面を望む(昭和63年頃)

狛江の地形



旧野川、旧清水川の河道は、国土地理院が所有する旧版地形図(1/20,000正式図「下布田」明治39年測図)や昭和20年(1945)～25年の間に撮影された空中写真画像等を参照し、想定される流路を記入しました。古い測量成果を資料としているため多少の位置ずれが生じています。旧野川の河道(破線部)については、江戸時代に流路が失われているため、地形データ等を元に想定される流路を記入しました。

国土地理院の基盤地図情報、数値地図(国土基本情報)を加工して作成

左の地形図は、数値標高データをもとに、地表の高低差を色彩と陰影で強調した地図です。

市域は、武蔵野台地の立川面と呼ばれる台地と多摩川によって形成された沖積低地に色分けされ、概ね平坦な市域も高低差を強調すると台地から低地へ緩やかに傾斜していることがわかります。

段丘面を見ると、市域のほぼ中央に縦断する谷筋が確認できます。旧野川によって形成された谷筋で、かつての野川はこの谷筋を蛇行しながら市域のほぼ中央を流れていました。また、狛江駅前の弁財天池から湧き出る地下水は、清水川を形成して東に延びる谷筋を流れていました。

市域は、台地と低地に分けられ、その境は崖線になります。崖線は"ハケ"と呼ばれる斜面で、崖下から地下水が豊富に湧き出し、雑木林の下に野草が繁茂して、生き物にとっては恰好の生息場所になっていました。

市域には68か所の遺跡が分布していますが、そのほとんどが水や食料の得やすい川や湧水の近く、台地の縁に位置しています。実際に市内の発掘調査では、多くの集落跡が台地の縁から確認されています。例えば弁財天池の周辺では、縄文時代の住居跡が数多く発見されており、古くから人々が自然の恵みを享受し生活を営んできたことがわかります。

古墳などの史跡や寺社の位置を地形図上に落してみると、台地の縁や低地でもその微高地に位置していることがわかります。私たちが無意識のうちに通り過ぎている地形の変化を、昔の人たちは感じ取り、また、経験則から微高地が伝えられ、台地の縁や低地の中でも微高地に大切なランドマークを築いていたことに気づかされます。

六郷用水の工事代官は駿河国出身の小泉次大夫で、小泉家伝来の治水技術を見込まれて、徳川家康から用水工事を命じられました。

地形図上に六郷用水の流路を落としてみると、台地の際と多摩川が接する地点に取水口を設け、台地の縁に沿うように開削されていたことがわかります。また、野川の流路を変え、用水路を谷間に渡して野川に合流させていたと想定されます。次大夫が高度な土木技術を駆使したことがうかがえます。

まちなかを歩いてみると、崖線や谷筋など、起伏のある地形を体感できるポイントがいくつかあります。

例えば、松原通りの田中橋の交差点から南方を眺めてみると…。
地図を片手に地形体感ポイントを探してみませんか。

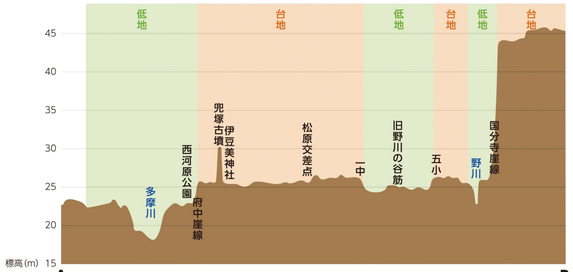
き 水神社前の坂
穴郷用水取水口の近く。台地と低地の境、ハケであることがよくわかります。
A-3

く 和泉多摩川交番脇
多摩川沿いの低地から台地上に向かって緩やかに上っています。
B-4

け あいとぴあセンター脇の階段
台地と低地の高低差がよくわかります。
A-3

こ こまえくぼ1234脇
かつての野川によってつくられた谷筋です。
C-3

狛江市の地形断面図



※この図は左の地形図(狛江の地形)における A-B地点の断面図です。

狛江も太古は海だった?!

武蔵野台地は、古の多摩川が運んだ砂礫が堆積してつくられた扇状地で、この武蔵野台地の南縁に沿って流れる多摩川が形成されたのは、約1万3,000年前のことと考えられます。

多摩川中流域の河原では、洪水などによって浸食され、砂礫が失われて河床が露出している場所が見られます。上総層群と呼ばれる関東平野の基盤になっている地層です。上総層群は、新生代第三紀の鮮新世後期(約300万年前)から第四紀の更新世中期(約100万年前)までに堆積した海成層で、砂岩や泥岩などからなり、貝の化石が多く産出します。

狛江の多摩川の河原でも、新生代第四紀の更新世前期(約130万年前)の地層が露出し、この場所からステラーカイギュウやホホジロザメの化石が発見されました。多摩地域の大部分には海が広がり、狛江にも海洋生物が泳ぎ回っていたことを物語っています。

自然とふれあう

狛江水辺の楽校

子どもたちが川に親しみ、自然とふれあえるよう環境学習の機会を提供しています。また、自然を通じて世代を越えた交流の機会を提供しています。

狛江弁財天池 特別緑地保全地区

陸軍大将荒木貞夫の邸宅の跡地で、昭和62年(1987)に、駅前の緑地と泉龍寺境内をあわせて「狛江弁財天池緑地保全地区」に指定されました。駅前の緑豊かな自然環境財産は、市と市民の協働で管理・保全されています。